

聖書：使徒9：1～9

説教題：サウロの回心

日時：2013年10月20日

使徒の働き9章、サウロの回心。これは単なる一人の回心の記録にとどまりません。彼の回心はキリスト教の歴史に決定的な重要性を持つ出来事と言えます。いや、世界史的な意義を持っているときえ言えます。このサウロの回心なくして、私たちが今手にしている新約聖書はありませんでした。彼は多くの手紙を書きました。ローマ、Iコリント、IIコリント、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ、Iテサロニケ、IIテサロニケ、Iテモテ、IIテモテ、テトス、ピレモン。これらが新約聖書からゴソッと抜き取られたらどうでしょうか。またこれらの手紙がなかったら、私たちが信じている重要な教理や神学もありませんでした。信仰義認、キリストとの結合、聖化、神の選び、聖徒の堅忍、栄化、等々。従ってパウロの影響を決定的に受けたアウグスティヌス、ルター、カルヴァンといった後の神学者たちもいなかったことになります。ある人はこう言いました。「イエスの生涯・死・復活を除いて、人類の歴史上、最も重要な出来事はサウルのキリスト教への回心である」と。このようにどんなに評価しても評価し過ぎることのない出来事が、このサウロの回心です。

まず注目したいのは、回心直前までサウロはどのように活動していたか、ということについてです。9章1節に「さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて」とあります。サウロが最初に出て来たのは使徒の働き7章58節でした。ステパノが殉教の死を遂げる場面です。その時、「証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。」とありました。そして8章1節に「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。」とありました。そしてエルサレムの教会に対する激しい迫害が起りましたが、その急先鋒となったのはサウロでした。8章3節：「サウロは教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れた。」しかし彼はこれで満足しなかったのです。それが9章1節の「サウロはなおも・・・」という言葉につながっているのです。

なぜ彼はこれほどまでの情熱を持って、主の弟子たちを迫害したのでしょうか。それは彼らの主張がユダヤの伝統的な立場から大きく外れる危険な思想に見えたからでしょう。主の弟子たちは、イエスこそ神が遣わした約束のメシヤであると言いました。しかし申命記21章23節に「木につるされた者は、神にのろわれた者だからである」とあります。そんな神に呪われた者をメシヤだと述べるのは、冒涇以外の何ものでもない。また7章で見たステパノらの主張がありました。ステパノはイエスを信じるこそ、モーセの遺志にかなったことであり、真に律法に従うことであると言いました。しかしそれではユダヤ人が先祖伝来大切に守り、誇りとして来た律法が軽んじられてしまいます。それはユダヤ人から神が与えてくださった特権と誇りと祝福を奪い取ってしまう非常に危ない思想に他なりません。こんな悪は早くに根絶しなければならぬ。旧約聖書にも例えば民数記25章に、モアブの女たちと不道徳の罪を行なった者たちを殺すようにと述べたモーセの言葉があります。祭司ピネハスは直ちにこれに従い、続くところにはピネハスに対する主の称賛の言葉が記されています。サウロはそのように主の御

心に反する者たちをさばき、取り除くことによって、主なる神により良く仕えることができると考えていたのでしょう。そこで彼はダマスコまでもイエスの信者たちを追跡して行ったのです。ダマスコはエルサレムから北へ 250 キロメートル近く行った大きな町で、そこにもユダヤ人の共同体がありました。サウロは大祭司に頼んで手紙を書いてもらい、それを持ってキリスト者狩りに出かけ、彼らの運動を撲滅させようと非常な熱心を示したのです。

こうしていよいよダマスコに乗り込もうとして、その町に近づいた時でした。突然、天からの光が彼を巡り照らします。この時の状況について、パウロが後の 22 章と 26 章で回顧する形で証ししていますが、そちらから分かることは、時は正午頃で、その光は太陽よりも明るく輝く光であったということです。サウロはこの光に照らされて倒れてしまいます。そして天から語りかける声を聞きます。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」この天からの光と声は、神の語りかけであることを示しています。サウロは、あなたはどなたであるかを教えてください、と問います。すると帰って来た声は、彼にとつてもない衝撃をもたらすものでした。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

これは彼にどんなメッセージを伝えるものだったのでしょうか。それはまずイエスは生きていくことを示すものでした。サウロにとってイエスは神に呪われて死んだ人でした。イエスの弟子たちは、イエスはよみがえったなどと言っているが、そんなことはあり得ない。彼は神にさばかれて死んだのだ。呪われて葬られたのだ。そのように全否定して来ました。ところが天からの声は「わたしはイエスである」と言ったのです。この言葉を聞いた時のサウロの驚愕を私たちは想像できるでしょうか。

また、そのイエスは今や栄光に包まれている方であることをこれは示しています。サウロに向かって今、太陽よりもまばゆく輝く光が照らしています。彼はそのために地に倒れてしまっています。何とあの呪われて死んだはずのイエスが、今、このように神によって高く上げられ、この上ない輝きの中におられる。

そして天からの声は、イエスと信者たちの一体性をも示していました。その声は「わたしは、あなたがた迫害しているイエスである。」と言いました。サウロはただイエスの信者たちを迫害しているだけです。ところが天からの声は「なぜわたしを迫害するのか」と問うています。ここに天にあげられた栄光の主と信者たちの深い結びつきが暗示されています。パウロの神学における特徴的な表現の一つに「キリストにあつて」という表現があります。短い表現ですが、これはキリストと信者の有機的結合を意味するものです。サウロはそのことをここで知らされたのです。自分が迫害してきた信者たちは、この栄光の主と一体の關係に結ばれている人たちである。だから天上の主は、「なぜわたしを迫害するのか」と言い、また「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」と言われたのです。

サウロはどんなに激しく打ちのめされたことでしょうか。これが意味していることは、自分のして来たことは全部間違いであったということです。神への熱心を持って取り組んで来たことすべてが、実は神の御心に全く逆行し、神ご自身に逆らうものであった。だからそんな自分をストップさせるために、神が介入された。サウロは愕然としたことでしょうか。彼が人生の全精力を傾けて積み上げて来たものは、一気にここで崩れ落ちたのです。彼は立ち上がれないほど

の大打撃をここで受けたのです。

しかし主イエス様がサウロにこのように現れたのは、キリスト教会最大の迫害者サウロを力でねじ伏せ、滅ぼすためではありませんでした。6 節で復活の主はサウロに「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」と言われます。しなければならないこととは何でしょうか。次回見ることですが、主は何とこのように彼に救いを与え、彼をご自身の働きのために用いようとされるのです。サウロは人々に手を引かれながらダマスコへ入ります。もともとの計画では、主の弟子たちを縛り上げる將軍として力強く入って行くはずだったのに、何と格好の悪い姿で入って行かなければならなかったことでしょうか。サウロは、目は開いていても何も見えませんでした。そして三日間、飲み食いしませんでした。とてもそんな状況ではなかったからでしょう。サウロは自分が立っていた基盤を根本から覆されました。彼は闇の中でただただ自分に向かって語られた栄光の主の言葉の意味を考えさせられていたことでしょうか。彼は何を思い巡らしていたのでしょうか。その中心にあったのは、やはりイエスはどんな方であるのかということだったでしょう。あの方はこれまで自分が思っていたような呪われた者ではなく、栄光の主、栄光の神なるお方である。ではなぜそのような栄光の主が、あのような十字架につかれたのか。答えはただ一つ。それは決してご自分のためではなかったということ。それは他者の救いのために、罪人の救いのためにご自分から進んで払われた代償的行為であったということ。神であるお方が、罪人たちのために、あのように身をかがめてご自分のいのちまでも与えてくださった。考えるだけでめまいがしそうなことです。そしてそのイエス・キリストが、逆らい続け、敵対し続けた私にも現れてくださり、今、私を滅ぼさず、次の指示を待つようにと言ってくださっている。サウロは徐々に新しい光のもとで自分と主イエスを見るように導かれて行ったのでしょうか。そして自らの罪を悟って悔い改めると共に、尊いいのちを持ってこんな者をも救ってくださるイエス・キリストの絶大な愛を知ることの素晴らしさを追い求める者へ導かれて行ったのです。

以上の箇所は私たちにどんなメッセージを語っているのでしょうか。何と言ってもこの箇所は、神の力の偉大さを私たちに示しています。キリスト教会の最大の敵・最大の迫害者であったサウロ。その彼がダマスコ途上で1回でこのように捕らえられてしまいました。誰も止められない彼を神がこのようにして阻止されました。しかも主はただ力でねじ伏せるのではなく、何とサウロを回心へ、彼をさらにご自身のわざのために用いる者とされます。ある意味でこのサウロの回心物語は、救いを頂いた私たちにも当てはまります。私たちもかつては主の御心に逆らう道をかたくに突き進んでいました。そんな私たちに主が一方的な恵みをもって介入してくださいました。その時、私たちもそれまでの自分が倒されるような経験をしました。自分は何と誤った道を進んでいたかを悟って愕然とさせられました。しかし同時に主はそんな者を救ってくださる恵みに満ちたご自身を示してくださいました。その恵みに支えられて、私たちも新しい人として立たせていただきました。まさにサウロに起こったのと同じことが私たちにも起こったと言えます。しかしサウロの場合はやはり特別です。彼はキリスト教の迫害の旗手です。キリスト者を次々に牢に入れ、死にまでも至らせていた人です。しかしそんな彼を主は回心へと導かれた。これを見る時、私たちは大いに慰められるのです。神に不可能はないのです。人

間にはできないことでも、神にはどんなことでもできるのです。

私たちもこの時の弟子たちのように様々な困難に置かれることがあるでしょう。どこにも望みが見えないようなピンチのただ中に置かれることがあるでしょう。しかし神はそこで何をなされるか、私たちに言い当てることはできません。神はここであのサウロを勝ち取ってしまわれました。私たちはこのような神が共におられることを信じて歩みたいと思います。神にとって不可能なことは一つもないのです。そして特に宣教において、このことを覚えたいと思います。私たちの目から見て難しいと思われる人がいます。無関心に見える人、いつまでも頑なな人、反抗する人、ひどい悪にふけっている人・・・しかしサウロの回心を見る時、どんなにひどい罪人でも救われ得るということを知ります。力強く、あわれみ深い神の御手が及ばない人はいないのです。ですから私たちはどんな人のためにも、その救いをあきらめることなく、祈り続けたいと思います。エペソ書3章20節：「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に」私たちはその方を見上げて、希望をもって祈り続け、なすべきわざに取り組み続ける主の民の特権と喜びに歩みたいと思います。